

鎌倉武家事典から学ぶ
坂東八平氏から生まれたのは……

2021年の検見川散歩を皮切りに、幕張・検見川・稲毛・千葉の歴史散歩を続けてきた。源頼朝を支えた主要な御家人の一人であった千葉氏の歴史が各所に残されていたのは、土地柄から言えば当然のこと。

結果として、源頼朝と千葉一族との関係に注目して千葉一族の系図や人脈を追い、功を上げて名を戴いた人々の歴史が少しずつ見えてきた。

年明けて2024年になり、閑暇なひとときを見つけて図書館へ行ってみたある日、一冊の不思議な書籍に出遭った。書籍の名前は、「鎌倉武家事典(出雲隆編・青蛙房)」。鎌倉幕府の興亡を辿り、そこに登場した人々についてその素性や貢献の内容が示され、それがどんな人脈や系図に発展していったのかがまとめられていた。二段組で600頁ある本はとて読破できるものではないので最初から諦めて、少しずつ拾い読みしては気になった所を細かく読んで見るという狡賢い読み方をすることにした。

「第二節 武士団の系統および武家倫理の形成」では桓武天皇の系列から「桓武平氏」が誕生するところに触れていた。この書籍では「鎌倉武家」全般を語っているのだから、当然のことながら「清和源氏」についても後の頁で誕生から盛衰が説明されているが、まずは「坂東八平氏」で始まる「桓武平氏」を深読みしてみることにした。

<1> 坂東八平氏

寛平元年(889年)、桓武天皇の曾孫である高望王は、宇多天皇の勅命により「平朝臣」と名乗ることが許された。昌泰元年(898年)、平朝臣高望が上総介となって関東入りし、その子孫達が関東各地の所領を得て継承してい

高望王 (平高望) 上総介	平国香①	常陸大掾・鎮守府将軍		った。のちに「坂東八平氏」と言われる武士団の始まりがここにあった。
	平良兼	下総介		
	平良将	鎮守府将軍		
	平良孫	上総介・鎮守府将軍		
	平良持	下総介	良持の子は平将門	
	平良文⑩	村岡五郎	武蔵国村岡を開拓	
	平良茂	常陸少掾		

<注釈> 国司に仕える役人の官位=守(かみ)・介(すけ)・掾(じょう)・目(さかん)

*守(かみ)=地域を統括する長官

*介(すけ)=守(かみ)の次官。但し常陸・上総・上野の三国は親王の任国で、親王は京に在住のため、現地の介が守の役割を代行した。

*掾(じょう)=国の規模が大きいところには掾が置かれ、責任の度合いに応じて大掾・掾・少掾があった。

<2> 平国香の流れ

平国香 ①	平貞盛 ②	鎮守府将軍・陸奥守	平維叙	上野介・常陸介・陸奥守
			?	五代後に義幹(常陸大掾)⑥
			平維時④	(五代後に北条時政)
			平維敏	陸奥守・上野介・常陸介
	平繁盛 ③	陸奥守	平維衡⑤	陸奥守・出羽守・伊豆守ほか(伊勢平氏)
			平維茂	余五
			平維幹	伊佐

国香の子は平貞盛(②)と平繁盛(③)。平貞盛の子平維時(④)の後裔から伊豆の北条氏・山本氏が出た。

平維衡(⑤)の後からは伊勢平氏が生まれた。

平繁盛(③)の系統から常陸の豊田氏・陸奥の岩城氏・出羽の城氏が出た。

常陸大掾氏(⑥)から分れて、鹿島氏・小栗氏・真壁氏・東條氏・下妻氏・三守氏・伊佐氏・石毛氏・行方氏・島崎氏・麻生氏・玉造氏・小高氏・吉田氏・石川氏・馬場氏・石崎氏が生まれて常陸一帯に根を張った。

<3> 平良文の流れ

平良文(⑩)は高望王の側室の子だった。昌泰元年(898年)に平高望が上総介となって関東入りした時には正室の子らは行動をともにしたが、良文は同道していない。延長元年(923年)に醍醐天皇の勅命を受けて相模国の賊討伐で功をあげたのち、武蔵国大里郡村岡(現在の熊谷市周辺)を開拓して「村岡五郎」を名乗った。熊谷・鎌倉・藤沢・結城などにも村岡という地名があり、平良文の所領だったことがわかっている。また、898年の平将門の乱の前後に相馬を手中にしており、側室の子ながらその影響力の大きさを示している。

平良文⑩	平忠頼	平将常(秩父氏)⑪			
		平忠常(上総介)⑫	平常将⑬	平常永	
			平胤宗	平基宗⑭	武蔵野與莊司
			平忠通	平為通⑮	衣笠に土着→三浦氏に
	平景通(鎌倉氏)	⑰			
平景村(鎌倉氏)					
平景成(鎌倉氏)					
平頼尊⑯					

平良文の孫、平将常(⑪)は武蔵権守だったが、秩父郡中村郷に土着して「秩父氏」を名乗った。

平良文—平忠頼(武蔵押領使・陸奥守)—平将常(武蔵権守・秩父氏⑪)—平武基(秩父牧別当)—平武綱—平重綱(武蔵権守)—平重弘—平重能—畠山庄司—畠山重忠 と血筋が広がっていった。

秩父氏の流れ(⑪)から派生したのは畠山氏のほかに、葛西氏・豊島氏・三上氏・吉田氏・小間氏・河越氏・小林氏・師岡氏・小山田氏・江戸氏・高坂氏・木多見氏・丸子氏・六郷氏・柴崎氏・飯倉氏・竹沢氏・小野氏・稲毛氏・榛谷氏・森氏・田伊氏・伊地知氏・長野氏・葛岡氏・大窪氏・中根氏・篠塚氏などが生まれた。その結果として、埼玉県秩父郡のほかに豊島郡・大里郡・入間郡、上野・下総・相模・甲斐などに一族が広がっていった。

平忠常(⑫)の子平常将(⑬)の流れは、千葉氏の誕生に繋がる。忠常の曾孫常兼は上総で大椎権介を名乗り、次代の常重が千葉介となった時に千葉氏を名乗り、千葉氏の開祖となった。

平基宗(⑭)は武蔵国野與(加須周辺)の莊司となり野與党が興り、埼玉の南埼玉郡・北埼玉郡・北足立郡・比企郡などを押さえ、さらに上野・下総にも手を広げ、武蔵七党とも呼ばれた。

この流れからは野與氏・白岡氏・鬼窪氏・渋江氏・萱間氏・道智氏・多賀谷氏・西脇氏・大相模氏・柏崎氏・金重氏・野崎氏・高柳氏・村山氏などが生まれた。

平為通(⑮)は三浦郡衣笠(現在の神奈川県三浦)に土着して三浦氏を名乗り、その後代々世襲して相模国から諸国へと広がって、和田氏・津久井氏・矢部氏・平塚氏・蘆名氏・岡崎氏・眞田氏・舞田氏・水原氏・大多和氏・多々良氏・長井氏・佐原氏・蛭河氏・佐貫氏・秦野氏・眞野氏・比田氏・藤原氏・会津氏などが生まれた。

平景通・景村・景成(⑰)は鎌倉氏を名乗り、この流れからは梶原氏・大庭氏・股野氏・長尾氏・長江氏・香川氏などの諸氏が出た。

平良文の第三子である平頼尊(⑯)からは、相模の中村氏・土肥氏・土屋氏が出た。

<4> まとめ

以上のように平高望王の子孫の中で関東に土着した豪族を「坂東八平氏」と呼ぶが、一般的な整理としては千葉氏・上総氏・三浦氏・土肥氏・秩父氏・大庭氏・梶原氏・長尾氏を指すことが多いらしい。

また、武蔵には平氏以外の氏族から出た武士団も多数あった。

横山氏・猪俣氏・児玉氏・丹氏・西氏の五党に平氏の村山氏・野與氏を加えて「武蔵七党」と言われた。

- 横山党は、小野篁の七代末裔の孝泰が武蔵守となって横山（今の八王子市横山町）に土着して、その子義孝が武蔵権介となり横山氏を名乗った。子孫は上野。相模に広く分散して、数多くの氏が生まれた。
- 猪俣党は、横山党の分派で、孝泰（前述）の三男が武蔵介となり猪俣（埼玉県児玉郡）に土着し猪俣氏と名乗った。明治22年（1889年）の町村制施行にあたり、猪俣村は周辺の村と合体して大沢村となってしまう、東児玉村となり、美里村となり、現在は美里町となった。猪俣という地名の存在は消え去ってしまったようである。
- 児玉党は、祖先は藤原氏に仕え武蔵介として武蔵国に下り、児玉（埼玉県児玉郡）の荘司などを努めて、児玉・秩父・大里から上野にまで広がって行った。
- 丹党は、養老3年（719年）に丹比県守が武蔵守となり、天平10年（738年）に弟の廣足が武蔵守となり、一族が武蔵守を世襲した。秩父郡・児玉郡を開墾して代々土着した。その後一族は入間・大里から上野・信濃に広がり、さらにそこから全国に広がって行った。
八高線に乗ると、児玉・丹荘という駅がある。地名・人名の歴史がここに残されていて、ほっとする。
- 西党は、日奉（ひまつり）宗頼が武蔵守となって子孫に世襲が進む中で、日野・立川付近に土着して、影響力は都築・橘樹（神奈川県）にまで及び、さらに全国に広がった。（村山党・野與党は前述のため省略）

「坂東八平氏」が登場して、「武蔵七党」が生まれて、「千葉六党」が活躍して、世の中が大きく動いてきた。各地の豪族らの中には、戦いを経て絶える者があったり、功を上げて領土を広げる者があったり、離合集散を重ねて、アメーバのように末裔を広げ千年以上の時が流れた。そして、「氏」が広がり「姓」が広がりながら、各地に「地名」や「人名」を生み出してきた。
あの地名はこの人由来なのかな、あの人名はこの地名由来なのかなと、後追いで結びつきが確認できる面白さがある。珍しい苗字（姓）の人や珍しい地名と出会っていると、その人の出自やその土地の歴史が気になって調べて見る事が多くなった。

以上